

シンポジウム2

3歳児神話を検証する2～育児の現場から～

恵泉女学園大学教授 大日向 雅美

<3歳児神話とは>

3歳児神話とは「3歳までは母親が子育てに専念すべきだ」という考え方だとのご紹介が既ありましたが、内容的には次の三つの要素から成り立っていると私は考えております。

まず第1の要素は、子どもの成長にとって3歳までが非常に大切だという考え方。第2の要素は、その大切な時期だからこそ、生来的に育児の適性を持った母親が養育に専念しなければならないという考え方。そして第3の要素は、もし母親が働く等の理由で、子どもが3歳まで、あるいは就学前ぐらいまでの時期を育児に専念しないと、子どもはとても寂しい思いをして、将来にわたって成長にゆがみをもたらすという考え方、です。

さて、心理学の観点から考えると、こうした要素から成る考え方は果たして神話か否かということですが、答えはイエスでもあり、ノーでもあると私は考えております。

まず、第1点の幼少期の大切さですが、これは否定してはならないと思います。

しかし、なぜ幼少期が大事かについても同時に考える必要があります。幼少期の課題は愛を知ることです。人から愛されて、他者を信頼する心を育みます。また他者から愛されて、自信を持つことができます。

そして、それほど大切な愛とはいったいどのようなものかを考えてみると、3歳児神話の第2の要素である「育児の適性は女性が生来的に持っているのだから、母親が育児に専念しなければならない」という考え方には、必ずしも絶対的な根拠はないといえます。

なぜなら幼少期に注がれるべき愛情は、適切かつ応答的な情報であり、それは母親だけが担えるものとは限らないからです。養育行動を想像していただければおわかりのように、子どもを抱き、笑顔であやし、食事を与えるという養育者の行動は、いずれも触覚、視覚、聴覚、味覚等の情報として子どもにキャッチされています。もっともいくら情報といっても一方的に与えればいいのではなく、子どもの状態に併せて応答的に与えられることが大切ですし、しかも、そこには子どもを愛おしく思い、子どもが育つ力を精一杯支援しようという責任感に裏付けられた温かな思いやりが込められている必要があることは言うまでもありません。

こうした愛情を注げるように母親も努力することは無論、必要です。しかし、母親以外の人、父親や祖父母、保育者や地域の人々もこうした愛を子どもに注ぐことは可能ですし、現に多くの人々がそうした養育行動を発揮しています。逆に母親であっても、置かれている生活環境が厳しい等の原因があって、苛立ちやストレスを強めてしまう結果、子どもに適切な愛情を注げない事例は少なくありません。

 ページトップへ

<母子関係を捉える視点について～生物学的な側面に偏る問題点>

ご承知のように、育児に悩みや苛立ちを募らせている母親、中には虐待に走って子どもの命を奪う事件も後を絶ちません。そうした現実があるにもかかわらず、なぜ「育児の適性は母親にあるのだから、母親が育児に専念すべきだ」といった考え方を人々は改めることができないのでしょうか。

この点を考えるためには、そもそも母子関係や「母と子の絆」とは何なのか、どのような視点から捉えるべきかを再検討する必要性を指摘したいと思います。

従来、母子関係や母性という、その生物学的な側面が強調されてきました。例えば子どもを産む女性は育児の適性を持っているという母性観は、まさに女性の産む能力を単純に育児能力につなげて考える考え方です。

これに対して、すでに古典的な定義となっていますが、ドイツ (Deutsch, H. 1944) は「母性とは、母の子に対する、社会学的、生理学的、感情的な統一体である」と定義しています。つまり、母親が子どもに対する関係には社会学的な要素、生理学的な要素、さらにパーソナルな感情的な要素が入っているものであり、母子関係はトータルに見ていく必要があるということです。

しかしながら、近年、この母子関係に関して、生物学的な側面を強調する動きが再び活発化しているのではないかと思います。例えば、少し古いものでは、母体のホルモン分泌の変動がもっとも大きい分娩後の一時期が子どもに対するマターナル・アタッチメントを生じさせる一番敏感な時期 (感受期) だとしたクラウスとケネル (Klaus, M & Kennell, J.H. 1976) の研究があります。新しいものとしましては、例えば、哺乳類にだけに見られるゲノムインプリンティング現象に関係した育児遺伝子が発見されたという指摘、あるいは授乳のときに赤ちゃんがおっぱいを吸いますが、そのときの吸啜刺激が起爆剤となって、下垂体から分泌されるプロラクチンとオキシトシンが母性行動の中枢を興奮させてスイッチオンの状態とするという考え方もあります。いずれも「科学的」と称するデータを根拠として、母親が育児に専念する重要性を強調しています。

母子関係のごく初期に、母親固有の生物学的な特性が有効性を発揮することは認められるのだと思います。しかし、ネズミやヤギ、サルなどの動物を被験体として、そこから得られた知見をもって直ちに人間関係を推論することに関しては、その限界に留意する必要があると思います。少なくともそのような研究が「科学的」だと称されて、母親が育児に

専念する重要性が過度に強調されることに対しては、大いに危機感を覚えます。

その理由は、私の専門領域が心理学であり、心理学の視点から母子関係を捉えるからです。心理学と言っても研究分野は非常に広く、研究視点も方法論も様々ですが、少なくとも私は心理学を次のように考えています。すなわち心理学というのは人を扱う学問、人と人との関係を扱う学問です。そして、心理学が対象とする人間は「特定の社会や特定の文化の中で生きている、特定の人」です。従って、心理学における科学とは人間一般の法則の樹立や一定の方式を求める科学ではありえないということです。

また私の研究手法の大半はインタビューと事例研究です。お母さん達の声聞きつけて30年近くになりますが、一番新しい研究では、1993年に全国6000余名にアンケート調査を実施しました。その結果を数量化して大体の傾向をつかんだ後は、5年あまりをかけてインタビューをいたしました。今も継続していますが、その人数は600名近くになっています。

正直に申しまして、インタビューで聞き出せる経験は共通のスケールも持ちにくく、あくまでも「ある個人」に特殊な経験に過ぎない場合が少なくありません。結果もきれいにまとまらないことがよくあります。しかし私は、個人の特殊な経験から遠ざかって、あるいは徹底的に個人にこだわらずに、どのようにして心理学の研究対象である個人を理解できるのか、疑問に思います。

[🔴 ページトップへ](#)

<3歳児神話の最も中核ともいえる母親の就労の影響について>

さて、最後に、3歳児神話の第3の要素、つまり母親が育児に専念しないと子どもの発達に歪むのか否かという点について、話を進めたいと思います。この点は3歳児神話の3要素の中でも最も人々が問題視するところですので、時間も多くさいて、お話しをさせていただきたいと思います。

この第3の要素の是非について申し上げる前に、この点を人々はどのように議論しているのか、昨年私が非常勤講師としてある大学で教えたときの学生たちの反応を例にご紹介してみたいと思います。

その授業のタイトルは「母と子の絆—その科学的な虚構性—」ですが、内容的には、私たちが一般に信じている母性愛や3歳児神話は、実は近代以降の社会的な要請によって作られたイデオロギーであるということ、しかも、本来は客観的であるべき学問、心理学や小児医学等の研究が、様々な形でイデオロギー形成に荷担した経緯について半年間にわたって講義をいたしました。

講義も終了近くになって、学生たちから「ぜひディスカッションタイムを持たせて欲しい」という要望が出ました。男女共学の大学ですが、「もしそういう時間を設定してもらえらるなら、私が司会をやります」と言う学生も出てきました。とかく、昨今の日本の大学生は受講態度が消極的だとか受身的だと言われますが、その授業の学生に関しては決して

そうではありませんでした。そして、ディスカッションの場を設けたところ、「一回では足りない」というくらい、非常に熱の帯びた議論を展開してくれました。3歳児神話や母性愛神話は、若い学生たちにとっても、育ってきた過程や自分たちの将来に関わる、非常に切実な問題として受けとめていることがよくわかりました。

さて、そこではどのようなディスカッションが展開されたのでしょうか。最初はどちらかというと優等生的な議論から始まりました。「今は男女共同参画の時代を迎えているのだから、女性だけが、母親だけが育児をすべきだというような3歳児神話にとらわれているべきではない」というような発言が続きました。これは私の講義の趣旨に添った発言です。半年近くずっと講義をしてきた教師に対するねぎらいなのかもしれません。学生はある意味優しいのだなとも思いますね。ただ学生たちは、決して私に対する迎合で言っているわけではないということは、ディスカッションを聴いていてわかりました。特にこれから就職をして社会に出て行こうという女子学生にとっては、3歳児神話を振りかざされることは、自分の人生設計が狂わされてしまう危険性もあるわけです。また講義では、昨今急増している虐待や母親たちの育児ストレスの問題も十分に伝えてきました。そのような問題の予防のためにも、母親一人に育児の負担を課するような3歳児神話の考え方から解放されなくてはいけないということを、真摯に発言する男子学生もいました。あるいは、社会人聴講生で、実際に共働きで妻と育児を分担している男性もいました。生活実感として聞ける言葉もありました。

しかしながら、全ての学生が3歳児神話を否定しているわけでは決してありませんでした。やがて、このような意見に対して、反対意見も出てきました。例えば、「僕は今日初めて講義に出ました。だからよけい素朴に聞けるんだけど、みんなの意見に違和感を覚える」という男子学生の意見が出ました。「これまでのみんなの意見を聞いていると大人、親、とりわけ女性の都合ばかり言っていて、子どもの気持ちが置き去りにされているのではないか。女性の高学歴化、社会参加の意欲が高まっていると言うが、子どものことを考えたら、女性は、母親は、ある時期、自分の生活を犠牲にしても、育児に専念する気持ちが必要だ」と。

このような言葉が、男子学生から2〜3続きました。当然、女子学生からは反論がありました。「なぜ女性だけが人生を犠牲にしなければいけないのか」「なぜ男性は、人ごみみたいに言うのか。子どもが生まれても、自分の人生をほとんど変えずに生きていける男性だから、そんな高みの見物みたいなこと言えるのだ」——このような反論が女子学生から出されました。


このようにして、この議論が男性と女性の戦いになりかけたとき、ある女子学生が、おずおずと手を上げてこう言いました。「私も女性ですが、やはり子どもが小さいときは、母親が家にいるべきだと思います。子どもってお母さんを一番求めていると思います。子どもはみんな家に帰ったとき、お母さんが家にいて欲しいと思うものです。うちは私が小さいとき、母が働いていました。とても寂しかった。あの寂しさは忘れられません。だから、私は結婚して子どもが生まれたら子どものために家にいて専業主婦として、育児に専

念するつもりです」——このような発言が女子学生から出されました。

それに対してすぐに別の女子学生が手を挙げて、次のように発言しました。「それは、あなたの個人的な経験と意見ではないですか。確かにあなたはお母さんが働いていて寂しい思いをしたかもしれない。でも、なぜ自分の経験が全てだと思うのですか。自分が寂しかったからといって、なぜ子どもというものはすべてがお母さんに家にいて欲しいと思うと決めつけるのですか。あなたは自分の経験をあまりに短絡的に普遍化しています」と。周りの男子学生から思わず「こわーい」というような声が漏れました。

先ほどの、「やっぱりお母さんは家にいるべきだ」と言った学生も、この元気のいい学生も、いずれもずっと半年間、私の講義を熱心に聞いてくれた学生です。おとなしそうにいう学生、元気に反論する学生、両者とも表現方法は違いますが、いずれも切羽詰った真剣な表情でした。特に、「自分の経験を一般化するな」と発言した学生は、さらに次のように言葉を続けました。「私は母が働き始めて、どんなに嬉しかったか。どんなにほっとしたかわからない」と。その学生の母親は働くことが好きな女性のように見えました。しかし、子どもが生まれてから、仕事をやめて育児に専念したそうです。3歳児神話を信じたのか、それとも仕事と家庭の両立に困難があったのかはわかりませんが、そうして育児に専念した母親の思い出というと、いつもイライラしていることだったようです。家に閉じこもっているストレスを、苛立ちとして発散するだけでなく、教育熱心という形でも発散したようです。仕事も何も全て捨てて母親になったという場合にありがちな傾向ですが、その女子学生の母親もすべてのエネルギーを子どもに注入したようです。「その息苦しさといったらなかった」と彼女が述懐していました。

ところが、やがて家を新築して住宅ローンを返済する必要性を理由として母親が働きに出たそうですが、彼女は本当にほっとしたそうです。また、「子どもが『ただいま』と帰ってきたとき、母親が家にいるべきだとよくいわれるけれど、私は生き生きと働いているお母さんを見るほうがずっと楽しかった」とも言いました。

 ページトップへ

<3歳児神話を議論する際の留意点>

このディスカッションについては、まだまだご紹介したい内容もありますが、時間が限られていますので、ここで止めましょう。

こうした学生たちのディスカッションは一例ですが、母親たちへのインタビュー調査の結果なども含めて、私は3歳児神話について、とりわけそのうちの第3の要素を議論する際の留意点として、次の4つを指摘したいと思います。

☆ひとの人生を変えるほど大きな議論をしているという自覚を

第1点は、3歳児神話の真偽を議論するということは、親、あるいはこれから親になる人たちの人生を変える可能性が高いことをしっかりと自覚した上で議論をすべきだということです。

例えば「女性が人生のある時期に育児に専念すべきか否か」という議論があります。もしそれを議論するとしたら、そのことで女性の人生の大半がかなり変わります。また人生に影響を受けるのは女性だけではありません。女性（妻）が育児に専念する代わりに、男性（夫）が生計の糧を担う必要性から、仕事人間となり、育児に関われないという問題も認識すべきではないかと思います。

さきほどご紹介したのは、学生たちの意見でした。しかし一方では、3歳児神話にとらわれて本当に苦しい思いをしている母親がたくさんいます。「3歳まで母親が育児に専念すべきだ」という考え方が世間では常識とされていますから、母親たちの多くもそれを信じて仕事をやめ、一生懸命育児に励んでいます。でも育児に全力を投じれば投じるほど、育児は辛くなってきます。「母親の私が立派に育てなければと肩に力を入れすぎて、思い通りにならない子どもに対して、こんなに私がかんばってるのに、なぜこの子はそれに応えてくれないのだろう」などと些細なことで苛立たざるを得ません。なかには心身に余裕をなくして、子どもに対して虐待に近い対応を繰り返している場合もあります。

また、50歳代半ばの女性はこのように語っていました。「私は3歳児神話を信じて、あるいは3歳児神話の信奉者である夫の言葉に負けて、仕事をやめ、『3歳まで』と思い、子どもを3人産み、そして育て、いつの間にか私は40歳代後半になりました。そのときすでに私は社会との関係を絶たれてしまっていました。『取り返しのつかない人生を送ってしまった』という思いがぬぐいきれません。子どもを育てたことは喜びでしたし、子育てを経験できたことに感謝はしています。でも私にも私自身の人生が欲しかった」ということです。

このような声を私たちはしっかりとみつめながら、3歳児神話の議論をしていくことが必要だと思います。

☆3歳児神話の議論は社会全体の議論に

留意すべき第2点。これは先ほどの二人の女子学生の議論の中で対極の二つの考え方が出てきたように、母親の就労が子どもに与える影響は一様ではないということです。一人の女子学生は、子どもはお母さんがいないと寂しい思いをすと言い、もう一人の女子学生はそんなことはないと言っていました。両方とも真実でしょう。

私たちはとかく「子どもというものは、母親というものは」と一般論で考えすぎてはいないでしょうか。

戦後の高度経済成長期以降、日本の社会は性別役割分業体制の下で経済発展を遂げてきましたし、性別役割分業体制を維持強化するために、母親が育児に専念する必要性が強調されてきました。日本の歴史を振り返っても、育児期の女性の大半が専業主婦になったのは、この高度経済成長期以降、近年に至るまでの半世紀あまりに過ぎませんが、世代からいえば、今の若い人の母親や祖母の世代が専業主婦として育児に専念しています。身近にみることのできる母親や祖母が専業主婦として生きるモデルを提供しているですから、それがあたりまえと思うでしょう。そして「母親は育児に専念すべきであり、そうでないと

子どもは寂しい思いをする」とステレオタイプ的に考えるのではないかと思います。でも、その一方で、「母親が家庭にいないとも子どもは必ずしも寂しい思いをしない」と考える人たちも当然、います。

なぜこうした考え方の違いが生じるのか、それを究明するのが科学だと思います。

この点に関してはすでいくつかの研究があります。そのうちアメリカで行われた2つの研究を紹介します。一つは、赤ちゃんが生まれてから10年近く、130組の家庭を追跡調査した研究です（ゴッドフライドら、佐々木保行訳『母親の就労と子どもの発達』ブレーン出版、1996年、参照）。この研究は10年近い縦断研究の期間に、専門家による子どもの行動評定や発達検査を何度も繰り返しているだけでなく、家庭訪問をして、親の就労状況や家族の生活状況についても詳細に調べていて、蓄積されたデータは質量ともに実に綿密で膨大です。同様の研究にアメリカ国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）が実施した研究があります。こちらはさらに規模が大きく、1364人の赤ちゃんを10年近く追跡しています。

いずれも詳細に子どもの発達に関するデータを積み、親の生活や家族関係、保育環境等との関連性が検討されていますが、そこから得られた結論は非常にシンプルです。すなわち「子どもの発達は、母親が働くか育児に専念するかという形だけでは議論できない」ということです。母親が働く場合でも、母親自身の就労態度、夫や家族の理解と協力、日中の保育の質、育児と仕事との両立に対する職場の支援のあり方等によって、子どもの発達は異なるということです。つまり、こうした条件がうまく機能していれば、母親が働いている家庭の子どもの発達はむしろ良好である結果が報告されています。一方、これらの条件が整備されていないとき、とりわけアメリカは保育の質が多様でして、望ましい保育環境に置かれていない場合もあります。そうしたケースでは子どもの発達に問題が生じる可能性も報告されています。

これらの研究からも明らかのように、「幼少期に母親が働くと子どもの発達が歪む」などと単純にいうべきではありません。しかし、それでは「親はどんな働き方をしても問題がない」ということも乱暴だということです。言い換えれば、子どもの発達を母親が働か働かないかという形だけで議論すべきではないこと、単に女性だけの問題として論じるべきことではないということです。就労環境や保育環境、家族の理解と協力を含めて、広く社会全体の問題として取り組んでいく必要があることを考えさせられるのではないのでしょうか。

☆子育てはドラマチックに語れない

次に3歳児神話を論じる際に留意したい第3点ですが、子育ては決してドラマチックなものではないということです。心理学者の氏家達夫氏は、妊娠中から出産後2年以上にわたって、56人の女性を追跡調査していますが、その結果、次のようなことを言っておられます。「いままでの研究成果に照らして、問題が起こってもおかしくないような条件をそなえたケースでも、またそのようなむずかしさの条件をほとんど持たないケースでも、たいていの場合、これといった問題が起こらず、現実的な行動＝思考＝感情システムを再

構成できた」ということです。私も子育ての大半はそのようなものではないかと思えます。非行や虐待が起こると、私たちはそれをもたらしたと想像される要因（変数）をつなぎあわせて想像しているだけではないかとも思うのです。その要因のつなぎあわせ方が、巧妙に行われると、あたかもそれを真実だと思ってしまうようなものかもしれないわけです。しかし、私たちの子育てはいくつかの変数を構築して一つのドラマとして出来上がるようなものではなく、もっと地道で複雑なものだと思います。だからこそ、単純な因果関係論の下で結論を急ぐべきではないと私は思います。

☆科学に幻想を持ちすぎる危険性

最後に、3歳児神話を論じる際の第4の留意点。これはただ今の第3点と関連することですが、概して子育て論とは、誰が担当すべきか、どのように行われるべきかを含めて、極めてイデオロギー性が高いということを自覚すべきだと考えます。

先にも申し上げたように、母性愛の強調や3歳児神話は近代以降の社会的、政治的、経済的な要請に基づいて作られたイデオロギーです（大日向雅美『母性愛神話の罨』日本評論社、2000年、参照）。

例えば母子の絆の重要性を指摘したボンディング理論がありますが、ボンディング理論の形成過程をつぶさに研究者アイヤー（Eyer, D.A.）は、母子関係の強調は、科学的な虚構だと指摘しています（大日向雅美・大日向史子訳『母性愛神話のまぼろし』大修館書店、2000年、参照）。もっとも医学や心理学の研究者が故意にイデオロギーの操作に荷担したとは私は考えておりません。むしろ、大半は善意でしょう。子どものためという善意です。しかし、結論を急ぎ過ぎると、見えやすいものを使って因果関係を説明してしまうのではないのでしょうか。例えば、母親が幼少期に育児に専念したか、しなかったかという変数は見えやすいものです。しかし、それだけで子どもの発達は単純にいけないということは、既に申し上げた通りです。

アイヤーの指摘も科学そのものを否定したものでは決してありません。誤解のないように申し上げますが、アイヤーは「科学に対して私たちが持っている幻想」を否定したのだと思います。「科学的な研究であれば、純粋に客観的な手法によって得られた疑いのない事実を提供しているはずだ」という幻想を持ちすぎることに警鐘をならしているのです。この学会が「育児を科学する」というサブタイトルをつけて開催されていますので、あえて科学に過度な幻想を持たない大切さを申し上げたいと思います。

昨今は子育てに対する危機感が社会一般に強まっておりますので、人々の疑問や不安に応えることは、研究者の大切な使命だと思います。しかし、子どもの発達過程や、そこに親がどういう影響力を及ぼすかということは、実はきわめて多様で個別性の高いものです。それゆえに不明瞭性も高いのです。わかったことを伝えること以上に、「何がわかっていないのか」を伝えることも人文科学が目指さなくてはいけない科学ではないかと思えますし、それが次の研究へと発展していく力になると考えております。

いただいた時間がちょうどきましたので、この辺りで終わらせていただきます。

<質疑応答>

質問1—— 女子医大の西田です。先ほど紹介された本と同時期に出版された『ゴースト フロム ザ ナーサリー』（育児室からの亡霊）という本があります。その両者で意見が違うのは当然なのですが、紹介された本の内容——それが科学的ではないということ——自体にバイアスがかかっていると思います。実は、『ゴースト フロム ザ ナーサリー』は同じような内容の記事を参考にし、多くの文献を利用して書いてあるのですが、同じような素材でありながら、著者によって全く違う方向が出ているのです。『母性愛神話のまぼろし』をもとに、引用されたものが科学的でないということでしたが、それはやはり問題があるのではないかと思いますがいかがでしょうか。

大日向—— 先ほども申しましたが、私はアイヤーが「こうした研究がすべて科学的でないと言っている」という意味では申し上げておりません。科学に過大な幻想を持つこと、科学であれば絶対に客観的で普遍的な事実を証明していると信じすぎることをアイヤーは批判していると申しましたので、そこはどうぞお汲み取りいただければと思います。

質問2—— 『母性愛神話のまぼろし』は私も読ませていただきました。それで、今の3歳児神話については、私はかなりイデオロギー的に捉えられすぎているのではないかと感じました。ここで伺いしておきたいのは、満1歳ぐらいまで、特に生後半年ぐらいまでの間の母乳栄養の問題について、発達心理学の立場の方ではどのように考えているのでしょうか。人間以外は、みんなそれぞれ牛は牛の乳で、サルはサルの乳で、なぜ人間だけ牛の乳で育てられなければならないのでしょうか。このような素朴な疑問があるのです。

大日向—— 今、先生は「サルや牛はなぜ自分たち以外の母乳を飲ませないのか」とおっしゃいましたが、それはサルや牛はミルクが作れないからではないでしょうか。

私は母乳をあげなくていいとは考えておりません。母乳の生理学的なメリットは充分認めなくてはいけないと私は思います。しかし、一方では母乳が出なくて苦しんでいる母親もいます。あるいは、行き過ぎた母乳礼賛運動の中で、育児ノイローゼになっている母親たちにもたくさん会ってきました。「母乳達成率100%を目指して」といった標語を大きく掲げている産院で、母乳の出が悪いために本当にみじめな思いをして、育児のスタートを狂わせてしまった母親たちもいます。「母乳をあげましょう。あげる努力を惜しまないで」と私も思います。でも、「どうしても出ないときはミルクがありますからね」とか、「お母さんが仕事や病気などの理由で母乳があげられない時は、お父さんもミルクで育児ができますよ」と、子育てに多様性を持たせるメッセージを発信していくことが、人間の子育てを考えるうえでは大切だと考えております。

